工夫して取り組んだこと

運営方式

〇子どもたちが遊びたくなってしまうため、時間を短くして開催
〇子どもを最優先に考え、子どもだけでも来られる日のみの開催に変更
〇テイクアウト形式や食材配布方式の導入
〇予約制（電話やＬＩＮＥなど）や入れ替え制、時間指定の導入
〇指定した場所にお弁当を取りにくることが困難な家庭のため、個別配達に切り替え
〇参加者にコロナ対応を理解の上、申し込んでもらう。
〇新型コロナウイルス感染予防対策手順(マニュアル)の作成、スタッフへの周知
〇運営スタッフや利用人数の制限
〇子ども食堂の再開にあたり運営者だけでプレ開催を実施し、マニュアルの手順、実施方法の流れを検証し、本番に備えた。
〇新型コロナウイルス感染症による自粛中は、子ども食堂の利用施設の方に食材を預け、子ども食堂の利用者が訪ねてきた時に手渡してもらっていたが、８月からは、食堂ボランティアが待ち受ける形をとり、子どもたちやお母さんたちから近況や今後について聞いたり、情報交換する形を採用した。
〇フードパントリーの開始にあたり、利用者への発信をタイムリーに実施したことで、来所者が増加した。

健康管理

〇入室時における非接触体温計での検温
〇手洗い、消毒の徹底や健康状態の確認

備　品

〇マスクやフェイスシールド、ゴム手袋の着用
〇使い捨て手袋、使い捨て食器、ランチョンマットの利用
〇テーブルクロスを撥水加工タイプに変更
〇料金支払いとして、コイントレイを使用
〇感染予防のための飲料提供時の個別ペットボトルの使用
〇スタッフのフェイスシールド、フェイスマスクの入手と仕切り（アクリル板は高額なためプラスチック製）を手作りした。

工夫して取り組んだこと

会場の工夫

３密を避けるため次のとおり会場の工夫を実施
〇出入口の一方通行、短時間、時間差をつけての呼び出し
〇換気の徹底（窓を開ける、扇風機・エアコンの活用）
〇室内の行事を駐車場などの屋外で実施
〇お互いの顔を見ながらも密を避けられるよう、テーブルを大きなコの字形に配置
〇向き合って座ることを避けた配置
〇部屋を細かく分けた。
〇１テーブルは１家族に限定。
〇イートイン・テイクアウトのいずれかをその場で参加者に選んでもらうこととした。

食　事

〇お弁当であっても、彩りや味のバリエーションを工夫し、生野菜を避けて、傷みにくいものを限られた予算内で、様々な制約の中でも子どもたちやご家族でおいしく食べて、少しでもリフレッシュできるように毎回工夫した。
〇飲食店に協力してもらい、アレルギー対策や栄養バランスを考えたお弁当を作ってもらった。また、協力してくれたお店の紹介とお弁当配布の意図を書いたカードをお弁当につけて渡した。
〇弁当のほか寄付された野菜を参加者におみやげとして配布した。
〇地元の商店会の個店を利用したものにし、地域活性にもつなげる。
〇食材に乾物が多いため、簡単メニューを添え、若い人が料理しやすいように配慮した。
〇コロナのリスクを避けるために、ワンプレート料理などにして、素早く食べられるようにした。
〇持ち帰りになるため。「今日中に食べること」のお題を書面に書いて渡している。
〇食後に工作をするのが当会の子どもたちの楽しみだったが、食事のみとしたので毎回スタッフがお土産として、工作を作成している。
〇提供メニューの工夫、従来の様な品数提供や、大皿による提供を止め、ボランティアの施設滞在時間短縮のためのメニュー、作業の工夫（カレー等の時短メニュー採用）

工夫して取り組んだこと

連絡先の把握

〇緊急時対応のための名簿の作成
〇参加者の連絡先を引き換え券の裏面に記入いただき、それと引き換えに食材を渡すことで万が一の連絡先を把握することに努めた。
〇自由参加だったため、新たに住所（連絡先）と一部の子どものみのアレルギーの聞き取りチラシを作成し、届け出てもらった。

様々な工夫

〇感染予防と子どもとの時間の充実：夏場の暑い時期であり、コロナ禍での実施について、食調調理上の衛生管理、３密を避けつつ、こどもたちに喜んでもらうため、公園になぞなぞを隠し、正解したら、ご褒美をあげるなどのプログラムを 30 分以内に終了できるよう、工夫した。
〇受付で熱を測り、名前と連絡先を書いていただき、お弁当のサイズと個数を書いた付箋を食券代わりに、配布場所でお弁当を引き換えることで流れができた。
〇調理ボランティアから高品質のアルコールスプレーのご提供があり、格段に効率がよくなった。
〇60 食限定としたものの、万が一予定数を上回る参加者が来られた場合を想定し、後日何らかの食材をお渡しする予約券をつくった。
〇自粛期間中から今日にいたるまで、ボランティアのモチベーション維持を考え、広報紙を発行してきた。８月の初めからは、毎月開催の定例会の議事録を全ボランティアに配信開始した。利用者にも近況のお知らせを配信した。
〇プラ容器の使用を減らすため、紙や木の素材などを利用する。
〇簡易パーテーションを購入して、三面を遮断する工夫をする予定だが、小さいお子さまが動き回るとそれも十分ではないため、そこをどうするかが課題。会場は畳なので、机といす形式より動き回れるため、感染防止に苦労しそうである。
〇学校との連携（校長やＰＴＡに趣旨説明、ポスター掲示）
〇子どもにヨーヨーを配布した。
〇神奈川県が実施する新型コロナウイルスの情報をＬＩＮＥにアップ
〇食べるときは、なるべく話をしないようにして、食べ終わりマスクをしてから、話すようにしてもらった。

活動するにあたり苦労したこと

手間の増／担い手の不足

〇予約制にしたため、予約受付と開催告知方法の変更に関する手間がかかる
〇配布時間を過ぎてから取りにきた人への対応
〇ボランティア人員を削減しているので、個々の負担が増えている。
〇ボランティアがシニア世代のため、安心安全な環境をつくるため、人数を制限せざるをえない。
〇コロナ禍での担い手不足

コスト増

〇撥水加工のテーブルクロスや、消毒液をはじめとする衛生対策の消耗品のコストが増加した。
〇高額になったマスク・消毒液・お弁当ケースなど出費が増加。
〇衛生管理や使い捨て食器の出費がかさんだ。ゴミが増える。
〇食器や箸ではなく、紙コップや割りばし、紙皿・持ち帰り用パックなどを使用して提供したので、金銭面では、より経費がかさんだ。

体調管理

〇熱中症のリスクや食中毒のリスクを回避するための工夫
〇コロナ対策と衛生管理、熱中症対策の両立

運　営

〇子どもたちに大声で話さないように注意しても守れないところがある。
〇感染予防のための器具の準備・テーブルの配置
〇15 名の入れ替え制としているが、常に参加者が数名上回り、入替のために待機してもらわないといけない。待機時間のお知らせをするにあたり、見込みを立てることが困難。
〇１軒１軒配達したため、車の手配と家を探すのに時間がかかった。また、各家庭の訪問時間調整に苦労した。
〇食器、調理器具は全て熱湯消毒することになり、その時間と労力が大変。
〇再開に向け、非接触型体温計、非接触型ディスペンサー、泡ハンドソープ、消毒液、透明プラマスク、フェースシールドなどの欠品状態が続き、納期が再開に間に合わないものもあった。

活動するにあたり苦労したこと

予　約

○弁当個数を把握のため、毎回予約制にしているが、予約なしで参加の子どもが複数いた。
○申し込み制だが、申し込みもなく又は当日キャンセルの連絡がないことがある。

ソーシャルディスタンスの確保

○キッチンが広くないので、ボランティア同士が調理中に対人距離を保つことが難しい。また、作業中には声を掛け合う必要があり気をつかう。
○短時間に多くの方が集中しないよう、間隔を置いてお待ちいただくなど、ソーシャルディスタンスの確保が大変。
○子どもたちが密集しないよう声かけ
○「密を避けて」と話しても、密になってしまう。
○お弁当を配布する予定の時間を大幅に遅れたり、密な環境になってしまったりで、戸惑った。
○名簿作りで人が密集してしまう。
○町内会館と隣接する公園を活用して、密を避けて、なぞなぞ宝さがしゲームを行ったが、天候次第では、会場を室内に移す計画も考えておいた。台風接近に時期が重なったため、密を避ける工夫を毎回苦労している。

今後の課題

担い手の確保

〇学生ボランティアの参加ができていない。
〇スタッフの高齢化
〇コロナ感染の不安を抱えながらの活動で、ストレスが高い。
〇高齢ボランティアへの意識付けの徹底
〇ボランティアは高齢者が多く感染することのないよう、万全の体制で臨まなければならない。活動制限させた中、ボランティアのモチベーション維持を考えていく必要がある。
〇少数のボランティアスタッフでは、持続的に活動することが無理がある。（例えば食堂開催日には、15 時から 21 時まで立ちっぱなしになる。）

スタッフの負担増

〇事務スタッフの負担軽減
〇食後の片づけが大変になったため、利用者が増えるとスタッフ負担が増す。
〇マスクに手袋姿で調理する負担が大きい。夏場はスタッフの健康管理も大切である。
〇調理ボランティアもコロナ感染を危惧して、現在少人数で対応している、このような状況では、新規ボランティアを募集しても集まらない。
〇ボランティアスタッフへの負担軽減をどうするか。（使い捨て弁当容器の導入・お椀で提供していた汁物は中止している。）

物品や食材の不足

〇マスクをしていない子に配布するマスクの在庫確保ができない。
〇参加する子どもの増加に伴い、炊飯器などの備品が不足している。
〇企業からの寄付も多かったが、寄付が集まらない場合の対策も考えなければいけない。
〇食材の提供は１回きりで済むことではなく、継続支援が必要。また乾物のみでなく、野菜等の支援ができるようになるとよい。（農家、野菜市場と連携を取り寄附をつのること。随時配達できる体制を整えること。）

今後の課題

資金面

○消耗品の購入費が増加しているので、来期以降の資金調達方法をどうするか。
○感染予防対応のための器具・消耗品のコスト確保
○昨年度まで、必要がなかった手袋・消毒・パック代など感染予防のための費用がかさんでいる。
○一食 300 円で提供しており、お米などの提供を受けているが経費がギリギリ。
○場所が手狭なためもう少し広い場所に移動したいが、資本金がない。
○食べている時間を少なくするために、カレーや、ワンプレート料理の提供を続けていこうと思うが、いかに効率よく経費節減をしながら、子どもたちに栄養のバランスのよい食事を提供できるかかが課題。

感染拡大時の対応

○再度、緊急事態宣言が発令された場合の今後の活動の検討
○感染拡大が広がったときの判断

コミュニケーション

○参加親子とのコミュニケーションが少なくなった。乳幼児の親ほどつながりを求めている。
○通常の時間に戻せるのか？遊びや工作をまたやらせてあげたいのでやり方を考える。参加者が以前のように戻ってきたとき、密にさせないために、２部制にするか。席の配置の工夫。
○ボランティアの中での認識の違いもあり、ボランティア同士のコミュニケーションを図るため、申し送りノートやメールを活用しているが、やはり、顔を合わせて意見を出し合う必要性を感じている。

広　報

○開催情報が教室のポスターを通じて子どもだけにしか伝わっていない。
○困っている人につながるように広報活動をもっと頑張る。

今後の課題

居場所としての子ども食堂

○学習支援を一人一人の子どもとの距離を取ることは難しい。また、子ども同士が楽しいひとときを過ごすことと対人距離を保つことは矛盾も多く、実行が難しい。
○子ども食堂の活動自体が密であることに、ある意味意義があるため、活動を継続していく中で、どのように折り合いをつけていくか。
○どのようにして、一堂に会して食事ができる本来の子ども食堂を安全に再開するか。
○「一緒に遊び、一緒に食事する」居場所としての役割を果たせない。７～８人でいつも来ていた小学生グループの参加がなくなった。
○大家族のようにみんなで一緒に食事をして親子の居場所になればと始めた活動だが、現在のお弁当のテイクアウトという形でよいのか、どのような意味があるのかといった、活動の意味を問い直す必要がある。
○単に食事をとるだけの場所ではなく、「居場所」としての役割をもつ活動で入替制をとることは非常に歯がゆい。
○子どもへの娯楽・サプライズ提供と新しい生活様式対応のバランス
○フードパントリーの意味を伝えることの難しさを感じる。
○本当に必要な家庭の子どもにどのように渡すか。
○食堂の提供はソーシャルディスタンスを維持し、接触感染、飛沫感染を考慮した運営ができたとしても、食事前・後の子どもたちの学習や遊びなどが制限され、子どもの居場所の提供が難しい。ボランティアを増強し、接触感染、飛沫感染を考慮した運営方法を考えていく必要がある。